

雪の日

樋口一葉

青空文庫

見渡すかぎり地は銀沙を敷きて、舞ふや 蝴蝶(こてふ)の羽(は)そで軽く、
 枯木も春の 六(りくくわ)花の眺めを、世にある人は歌にも詠み詩にも作
 り、月花に並べて称(たた)ゆらん 浦山(うらやま)しさよ、あはれ忘れがたき昔
 しを思へば、降りに降る雪くちをしく悲しく、悔(くい)の八千度(やちたび)その
 甲斐もなけれど、勿(もつたい)躰(みはか)なや父祖累代墳墓の地を捨て、養育
 の恩ふかき伯母君にも背(そむ)き、我が名の珠に恥かしき今日(けふ)、親(きず)は瑕
 なかれとこそ名づけ給ひけめ、瓦に劣る世を経(へ)よとは思(おぼ)しも置か
 じを、そもや谷川の水おちて流がれて、清からぬ身に成り終りし、
 其(その)あやまちは幼(おきなぎ)気の、迷ひは我れか、媒(なかだち)は過ぎし雪の日ぞかし。
 我が故郷は某の山里、草ぶかき小村なり、我が薄井(うすゐ)の家は土地

に聞えし名家にて、身は其(その)一つぶもの成りしも、不幸は父母はや
く亡(う)せて、他家(ほか)に嫁(か)ぎし伯母の是れも良(をうと)人を失なひたるが、
立歸りて我をば生(おほ)したて給ひにき、さりながら三歳といふより手
しほに懸け給へば、我れを見ること真実(まこと)の子の如く、蝶花の愛親(おや)
といふ共(とも)これには過ぎまじく、七歳よりぞ手習ひ学問の師を撰(え)ら
みて、糸(いと)竹(たけ)の芸は御身づから心を尽くし給ひき。扱(さて)もたつ年
に関守なく、腰揚(あげ)とれて細眉つくり、幅びろの帶うれしと締(し)めし
も、今にして思へば其頃の愚かき、都乙女の利発には比(くら)らぶべく
も非らず、姿ばかりは年齢ほどに延びたれど、男女の差別なきば
かり幼なくて、何ごとの憂きもなく思慮もなく明し暮らす十五の
冬、我れさへ知らぬ心の色を何(いづこ)方の誰れか見とめけん、吹く

風つたへて伯母君の耳にも入りしは、これや生れて初めてのの、仇あだな

名 ぐさ恋すてふ風説なりけり。

世は誤あやまりの世なるかも、無き名とり川波かけ衣、ぬれにし袖の相

手といふは、桂木一郎とて我が通学せし学校の師なり、東京の人
なりとて容貌みめうるはしく、心やさしければ生徒なつきて、桂木先

生と誰れも褒めしが、下宿は十町ばかり我が家の北に、法正寺と

呼ぶ寺の離室はなれを(かり)仮はなれずみなりけり、幼なきより教へを受くれば、習な
らはし

慣うせがたく我を愛し給ふこと人に越えて、折ふしは我が家を
も訪ひ又下宿にも伴なひて、おもしろき物がたりの中に様々教へ
を含くめつ、さながら妹の如くもてなし給へば、同(はらから)胞はらからなき身

の我れも嬉しく、学校にての肩身も広かりしが、今はた思へば実げ

に人目には怪しかりけん、よしや二人が心は行(ゆくみづ)水の色なくとも、結ゆふや嶋田鬻こどもこれも小児ならぬに、師は三十に三つあまり、七歳にしてと書物の上には学びたるを、忘れ忘れて睦みけん愚かさ。

見る目は人の咎(とが)にして、有るまじき事と思ひながらも、立ちし浮名の消ゆる時なくば、可あた惜白玉きずの瑕きずに成りて、其身一生の不幸のみか、あれ見よ伯母そだてにて投げやりなれば、薄井の娘が不ふ品行しだらさ、両親あれば彼(あ)の(やう)様にも成らじ物と、云ひたきは人の口ぞかし、思ふも涙は其方そちが母、臨終いまはの枕に我れを拝がみて。姉様お願(ねがひ)は珠(なま)が事をと。幽(かす)かに言ひし一言あはれ千万無量の思ひを籠めて、まこと闇路に迷ひぬべき事なるを、引受けし我れ其(その)甲斐(かひ)も

なく、世の嗤ものわらひ笑ものわらひに為しも終らば、第一は亡き妹に対し我が薄
 井の家名に対し、伯母が身は抑そもそも何とすべき。と御声ひく、四壁あたり
 を憚りて、口数すくなき伯母君が思おほし合あはすることありてか、し
 みじみと諭さとし給ひき、我れ初めはひたすら一向夢の様に迷ひて何ごと、
 も思ひ分かざりしが、漸やうやう々伯母君の詞するどく。よく聞けよ
 お珠、桂木様は其方を愛で給ふならん、其方も又慕はしかるべし、
 されども此処きまりに法ありて、我が薄井の家には昔しより他郷の人と
 縁を組まず、況ましてや如何に学問は長じ給ふとも、桂木様は何者の
 子何者の種とも知らぬを、門閥家いゑがらなる我が薄井の聳とも言ひがた
 く嫁やにも遣りがたし、よし恋にても然しかぞかし、無き名なりせば
 猶なほさらのこと、今よりは構へて往ゆきき来もし給ふな、稽古もいら

ぬ事なり、其方大切なればこそお師匠様と追(ついで) 従(しゆ) もしたれ、
益(えき)も無き他人を珍重には非らず、年(とし)来(ころ)美事に育て上げて、人
にも褒められ我れも誇りし物を、口惜しき濡(ぬ)れ衣(ぎぬ)きせられしは彼
の人ゆゑなり、今までは今までとして、以(これより)来(ふつ)は断然(ぜん)と行(な)ひを
改(あらた)ため、其方が名をも雪(そ)ぎ我が心をも安めくれよ、兎(と)角(かく)に其
方が仇は彼の人なれば、家(いへ)を思(おも)ひ伯母(おば)を思(おも)はゞ、桂木(かき)とも思(おも)すな
一郎(いちろう)とも思(おも)すな、彼(か)の門(かど)すぎる共(とも)寄り給(たま)ふな。と置(お)みかけて仰(おほ)す
る時(とき)我が腸(はらわた)は断(た)ゆる斗(ぼ)に成(な)りて、何(なに)の涙(なみだ)ぞ睡(まぶた)に堪(た)へがたく、袖(そで)に
つゝみて音(ね)に泣(な)きしや幾(いく)時(とき)。

口惜(くせき)しかりしなり其内心(こころ)の、いかに世の人とり沙汰(さた)うるさく一
村(むら)挙(こぞ)りて我れを捨(す)つるとも、育て給(たま)ひし伯母君(おば)の眼(まなこ)に我が清濁(せいじやく)は

見ゆらんものを、汚けがれたりとや思す恨らめしの御詞、師の君とて
 も昨日今日の交りならねば、正しき品行は御覧じ知る筈はずを、誰が
 讒さかしら言に動かされてか打捨て給ふ情なさよ、成らば此胸かきさば
 きても身の潔白あらの蹟はしたやと哭きしが、其心の底何者の潜みけ
 ん、駒こまの狂まひに手綱すべの術も知らざりしなり。

小簾をすのすきかげ隔てといへば、一重ばかりも疾やましきを、此
 処十町の間に入目の関きびしく成れば、頃は木がらしの風に付け
 ても、散りかふ紅葉のさま浦山しく、行くは何処どこまでと遠く詠ながむ
 れば、見ゆる森かげ我を招くかも、彼の村外れは師の君のと、住
 居のさま面かげに浮かんで、夕暮ひゞく法正寺の鐘の音かなしく、
 さしも心は空に通へど流さすが石に戒しめ重ければ、足あしは其方に向

けも得せず、せめては師の君訪ひ来ませと待てど、立つ名は此処
 にのみならで、憚りあればにや音(おとづれ)信もなく、と絶えし中(だ)に千
 秋を重ねて、万代(よろづよ)いわふ新玉(あらたま)の、歳たちかへつて七日の
(きた)日來りき、伯母君は隣村の親族がり年始の礼にと趣き給ひしが、
 朝より曇り勝の空いや暗らく成るまゝに、吹く風絶へたれど寒さ
 骨にしみて、引入るばかり物心ぼそく不(ふと)図ながむる空に白き物
 ちらく、扱(さて)こそ雪に成りぬるなれ、伯母様さぞや寒からんと炬
(こたつ)燧のもとに思ひやれば、いとど降る雪用(ようしや)捨なく綿をなげ
 て、時の間に隠くれけり庭も籬も、我が肘(ひぢ)かけ窓ほそく開らけば
 一目に見ゆる裏の耕地の、田もかくれぬ畑もかくれぬ、日毎に眺
 むる彼の森も空と同一(ひとつ)の色に成りぬ、あゝ師の君はと是れや抑(そも)

（そも）
々まよひなりけり。

（わざは）
禍ひの神といふ者もしあらば、正しく我身さそはれしなり、此
時の心何を思ひけん、善とも知らず悪しとも知らず、唯懐かしの
念に迫まられて身は前後無差別に、免がれ出しなり薄井の家を。

是れや名残と思はねば馴れし軒ばを見も返へらず、心いそぎて
庭口を出しに、嬢様この雪ふりに何処へとて、お傘をも持たずに

かと驚ろかせしは、作男の平助とて老実まめやかに愚かなる男なりし、

伯母様のお迎ひにと偽れば、否や今宵はお泊りなるべし、是非お
迎ひにとならば老僕おやぢが参らん、先待給へと止めらるゝ憎くさ、真ま
実は此雪に宜くこそと賞められたく、是非に我が身行きたければ、
其方は知らぬ顔にて居よかしと言ふに、取しめなく高笑ひして、

お子達は扱らちも無きもの、さらば傘を持給へとて、其身の持ちしを我れに渡しつ、転ろばぬ様に行き給へと言ひけり、由縁(ゆかり)あれば武蔵野の原こひしきならひ、此一言さへ思ひ出らるゝを、(おも)(いで)無情つれなかかりしも我が為、厳しかりしも我が為、未宜すまよかれとて尽くし給ひしを、思ふも勿躰なきは伯母君のことなり。

(か)斯くまでに師は恋しかりしかど、夢さら此人を良人つまと呼びて、共に他郷の地を踏まんとは、かけても思ひ寄らざりしを、行(ゆくか)方たなしや迷ひ、窓の呉(くれたけ)竹たけふる雪に心下したを折れて我れも人も、罪は誠の罪に成りぬ、我が故郷を離れしも我が伯母君を捨てたりしも、此雪の日の夢ぞかし。

今さらに我が夫を恨らみんも果敢(はか)なし、都は花の見る目うる

はしきに、(みやまぎ)深山木の我れ立ち並らぶ方なく、草木の冬と一人し
 りて、袖の涙に昔しを問へば、何ごとすも総べて誤なりき、故郷の
 風の便りを聞けば、伯母君は我が上を歎げき歎げきて、其歳の秋
 かなしき数に入り給ひしとか、悔こそ物の終りなれ、今は浮世に
 何事も絶えぬ、つれなき人に操を守りて知られぬ節ふしを保たもたんのみ、
 思へば誠と式部が歌の、ふれば憂さのみ増さる世を、知らじな雪
 の今歳も又、我が破れ垣をつくろひて、見よとや誇る我れは昔し
 の恋しき物を

(完)

青空文庫情報

底本：「新日本古典文学大系 明治編 24 樋口一葉集」岩波書店

2001（平成13）年10月15日第1刷発行

初出：「文学界 第三号」

1893（明治26）年3月31日

※括弧付きのルビは校注者が加えたものです。

入力：土屋隆

校正：noriko saito

2007年8月9日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

雪の日

樋口一葉

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>